

原始仏教における 四念処について

安藤 正 見

四念処 (catāro saṃpañhāna) の教説は、原始仏教聖典の随処に説かれている。なかでも『長部』の第二二経や『中部』の第一〇経は、「念処」(saṃpañhāna) の名を冠し四念処を説く經典として、つとに有名である。この四念処についての研究は、これまで二・三のものを見ることができ、また今日でも南方上座仏教徒の間においては非常に重要視されている。ところで、この經典は、その内容において教理網目を種々列挙するなどアビダルマ仏教の性格を擁した部分も多く、また後世の付加も少なくないように思われる。本稿では、この点に注意を払いつつ、四念処中、まず最初の身念処を取り上げ、不浄想との関係や身至念との関わりを中心として、原始仏教聖典における初期の思想を伝えていくと見做される Dhammapada, Suttanipāta や Theragāthā, Therīgāthā などの詩句に、その原始形態を求めてみようと思う。

ところで『念処経』における「身念処」の用語は、漢訳經典において見いだされる語であり、パーリでは通例「身体において身体を観察して住す」(kāye kāyapaṇassī vīharatī) とつづ用いられている。ところが Dhammapada などを見ると「身至念」(kāyaga-ttsati) として説かれている詩句を数多く見出すことができる。こ

れらの詩句は、kāyaga-ttsati の語を用いることによって身体に対する念を全て包含していたものと思われる。さて『念処経』においては、身念処の内容を、①正念にして出息入息する、②自己の行住坐臥なる状態を知る、③腕の屈身や衣鉢の保持などあらゆるものに對して正知する、④この身体の各部分が不浄に充ちるものであることを観察する、⑤この身体を地・水・火・風の界に従つて観察する、⑥墓に捨られた死体の種々相を観察する、ことを詳細に説明している。つきるところは、実体としてのこの身体が生滅する不浄なるものであり、不浄なる身体に對する執着の心を捨てることを強調するものにほかならない。このような身体に對する観察は、すでに早くから不浄想や骨想として独立して行なわれていたものと思われる。例えば suttanipāta を見てみると『勝利経』(Vijayasutta; 193 G-206G) において身体についての種々な觀察がなされている。ここではまず行住坐臥が身体の動作 (kāyassa iñjana) であると説き、続いて身体の各部分を腸・胃・肝臓・膀胱・心臓・肺臓・腎臓・脾臓・鼻汁・粘液・汁・脂肪・血・関節液・胆汁・膏などの十六に分けて説き、九の孔からは、不浄物 (asuci) が流れ出ることを説いている。また死体については、膨張して青黒くなつた状態と鳥・虫類に食い荒された状態の二種相を説いている。そして内においても外においても身体に對する欲を離れる (ajjhattaṃ ca bahiddha ca kāye chandanā virājaye) べきことを説き、この身体に對する欲食を離れる (chandarāgaviratto) ものが不死・平安・不滅なる涅槃の境地に達する (ajjhagā amatam santim nibbāna-padam accutam) ことを説いている。この『勝利経』における説明は、『念処経』における身念処の内容と非常によく似た形を示している。このような

身体に關しての觀察が、すでに古い資料に説かれていることは『念処經』の成立を考える場合、充分注意されなければならないであろう。Suttanipāṭa におけるこのような体系的な身体に關しての説明は『念処經』との関わりを示唆する点において例外的である。詩句にみられる身体に關しての説明は、一般的には独立した形で説かれている。以下、この点についてみてみよう。『念処經』においては、身体の各部分を三十一に分けて、この身体が不浄に充ちていることを説いている。もちろん前出した『勝利經』にすでにこのような傾向を見出すことができるのであるが、むしろ最初期においては「合成身」(saṃussaya) とか「積集身」(saṃdha) などの語が用いられて多々説かれている。これらの詩句のうち特に我々の興味を引くものは、Therīgāthā の二五二偈から二七〇偈までのアンパリー比丘尼の告白であろう。ここでアンパリー比丘尼は、過去の若き時における身体の美しさと、現在の年老いた醜い姿を實に對象的に述べている。そして最後の二七〇偈において「この合成身は是の如く老衰して、多くの苦しみの依る処である」(avaṃ saṃussayo jajjaro bahudukkhānam alayo) と、述べている。詩句における合成身や積集身についての具体的な説明は、これ以上詳しく説かれてはいない。しかしこの身体そのものを多くの苦しみの依る処と説くことは、『念処經』における不浄なる各部分によつて身体が構成(合成)されているとする説明の理論的背景となつたであろうことは充分考えられる。

次に不浄想(*asubha-sañña*)について考察を加えてみたい。『念処經』では、身念処の説明の最後に極めて精緻な死体の種々相を九種に分けて説いている。このような死体の種々相に言及している詩句

原始仏教における四念処について(安藤)

はあまり多くなく、前出した『勝利經』における「二種相と Therīgāthā の一八偈にみられる骨想(*atthi-sañña*)に關しての詩句のほか『念処經』と同様な死体の種々相にふれているものはあまりない。むしろ原始仏教の最初期においては、不浄(*asubha*)として多くの場合説かれている。これらは「心一境性」(*cittassa ekaggatā*)と結びつけて説かれることもあつた。例えば Therīgāthā の十九偈には「病氣で不浄で腐つた身体を見よナンダーよ。不浄想によりて、一点によく三昧した心を修せよ」と、説かれている。この心一境性は、三昧(*samādhi*)の別名にほかならず不浄想が精神統一のための一方法として早くから重要視されていたことを指摘することができる。またこの不浄想は、*kāyagatāsati*とも結びつけて説かれることもあり、『念処經』において不浄想が種々詳細に説かれるひとつの要因とみられることもできる。

以上、本稿では四念処中、身念処を取り上げ、原始仏教における最初期の思想を伝えていると見做される諸經典の詩句に、不浄想や合成身についての説明を見てきた。これらを要結すれば、この身体が「苦しみの依る処」や「食を伴なえる不浄なるもの」として、すでに早くから徹底的に追究されており、『念処經』における身念処の理論的な背景になつているものと思われる。また精神統一としての三昧に至るひとつの方法として、不浄想が極めて重要視されていたことも指摘しうる。(注省略)

(愛知学院大学図書館嘱託)